宗像

毎月一日発行
発行所　宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代②1311
定価一年送料共　500円

咲き競う秋しくの花

――西日本菊花大会……境内で開催――

宗像大社菊花会主催の第三回西日本菊化大会は、十一月一日に開幕した。

当大会の会場となった宗像大社二門前の境内には、陳列ハウス五十棟余（延べ百数間）が仮設され、約一四〇〇鉢の菊花が出陳された。大輪、懸崖、盆栽、盆景、福助、菊人形、千輪咲、管物、一文字等々と種類も盛りだくさんで、菊花の全種目がそろって壮観であった。

この大会は十一月二十日までの開催であるが、この間に地元を始め各地の老人大学や成人学級の園芸視察や菊づくりの勉強会があるなど、年々、本大会は注目を浴びている。

本大会の特筆すべき点は、本年より大会名称を変更し、西日本菊花大会と改め、名称通りの大会にすべく第一歩を踏み出した事である。

この為、本大会より福岡市地区の数名が早くも会員となり出品されるなど活発な動きがみられるが、一方では、開催地である宗像地区の花作り啓蒙と組織化も進んでおり、各地各会にあっても若年層への啓蒙と老人大学等への趣味昂揚に対する協力などが進められている。

また、本年度大会を契機として進められている後援会発足についても、定通り進捗がみられ、本年度ご協賛頂いた方々や法人には全面的に後援会入会をお願いした。

このように、多くの花づくりの方々の熱意と、花を愛する人々の心からの支援は大きな実を結ぼうとしている。

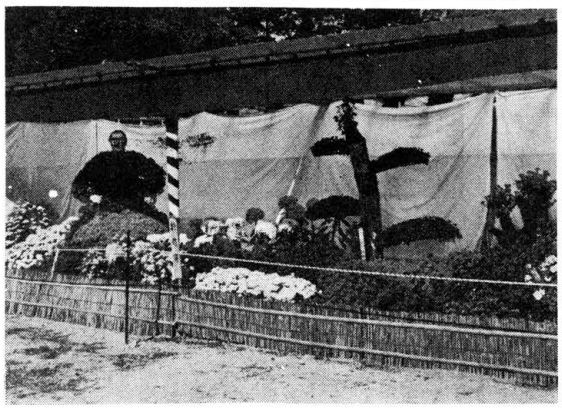
中でも地元の青年団と宗像郡商工会青壮年部の勤労奉仕は各方面に大きな反響を呼び、絶賛をあびている。今日まで、当菊化展の賛助者の努めである宗像大社の職員のみで諸設備の設営などに当って来たが、模様の拡大にともない、菊花ハウス仮設だけでも約十日程かかるなど、頭痛の種であった。

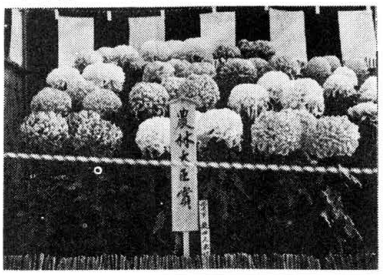
農繁期による人手不足は本大会の致命的要素であったが、秋季大祭に引続き地元青年団数名が率先して勤労奉仕をされた。しかし、これでも見透しは暗く、非農家の多い宗像町商工会に当菊化展の趣旨を説明して依頼したところ、郡の商工会青壮年部で奉仕しようということになり、同青壮年部約四十名が熱心に奉仕、補設遅延を一挙に解決してくれた。

これをもれ聞いた地元や郡内各町村関係者、当菊花会関係者も「この様な心あたたまる話を聞いたのは久しぶりだ」と大いに喜んでいる。

当菊花会の目的に掲げる国土に花を、この様な心ある人々の支援と結果によって成就する。

宗像大社としても、こういった精神的啓蒙の推進にも配心して当菊花会に賛助していく所存であるが、ともあれ境内にはこれら人々の努力の結果が美事に開花している。





赤白黄を基調として各種目の各花がほど良く配列され、一大花壇群を形成し、鮮やかに美しい。拝観者は、深みゆく秋の境内で咲競う菊花に刻がたつのも忘れて見とれ、一年がかりで作り上げられた作品一つ一つを賞讃してやまなかった。

……

古式祭の御案内

八百年の伝統をもつ当社古式祭並びに御座が左記の通り斎行されます。皆様お誘い合せの上御参列下さい。

記

「御座」

一、日時　十二月十五日午前六時より午前十時まで

一、場所　宗像大社清明殿

神具、装束
結婚式場用品
株式会社
井筒
九州店　福岡市吉塚一丁目三五番二号（〒八一三）
電話福岡（九二）六五一九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一二三四（代）・六二八番

【御礼】

宗像大社菊花会主催、第三回西日本菊花大会に対し協賛いただきましたことに対し心より厚く御礼申し上げます。

昭和四十八年十一月吉日

宗像大社菊花会　会長　高原鹿吉
宗像大社　宮司　葦津嘉之

◇

日産運送株式会社殿
株式会社　山本工作所殿
来島吉郎殿
出光興産株式会社殿
新出光石油株式会社殿
梅月堂殿
久田運輸殿
弘江組殿
新宮運送株式会社殿
南洋商会殿
木下暦三殿
玄海町青年団殿
伊豆造出殿
岩佐光次殿

◇

株式会社　栗組殿
門司砂石工業株式会社殿
弼川淳殿
川口屋染工店殿
みなと荘殿
鎮西運輸株式会社殿
赤岩材木店殿
宗像郡商工会青壮年部殿
郡内各町村長殿
井上光次殿

論説

一寸の虫の魂

機械文明の進歩、便利が面倒を伴って廻る。朝に環境汚染を論じ夕べに損害賠償を議する、セチ辛い世相に長嘆息を余儀なくされる。そんな協議に誘い出されて留守番させられる老人、電話番が どこかの飲み屋と間違えられる迷惑も、娯楽番組の楽しみを遮り、読書を中断させて、嘆息の数を増してくれる。「間違いだ」と電話の間抜」と言い放って受話器をガチャン。間抜けの無駄を聞くだけ。留守番の老人は、決して電話に出ないことにした。間違いでない用事のためにかけてくる先方もあろう。不親切だと思い直しても受話器を取る勇気が出なくなっては、文明の便利さも煩わしいもの、とケチる福祉背反に陥れる。

とにかく愛情を忘れかけてきた日本である。列島くるみ水銀禍が報道されるが、国民、そって権利病に罹っているかと案じられる。訴訟が、毎日のように読まれぬ日はない。生きる権利が知る権利を呼び、更に知る権利を燃やす。そして争議から訴訟へと走る。

人間尊重は「私を尊重せよ」であって、それを要求することが正義であり、権利の放棄は人間冒涜不正義である、となっては他人の立場を考える必地などはない。どうしようか、権利病蔓延の日本列島、悲観する以外ないか。

最近の新聞に、ある女優の感想が紹介されていた「私は車を運転して混み合う交差点で信号を待つ間、笑いながらまわりの人達に手を振る。それは人気取りの媚ではない。いらいらする気の焦りを、お互いにいいくらかでもほぐせたらと思うから」と。これが少しでも事故を防ぐ心のなごやかに役立つと思えば、よい心がけと読んだ。互譲互恵、周囲の安泰なくしては、自己の平穏無事もない。

周囲の安泰はどうでもよい、法律が保障する自己の利益だけを守ればよいと見られる賠償請求訴訟の記事を目につく。その損害賠償は、夜中に倉庫に泥棒にきた不良少年を、警備の警官が暗闇の中で誤撃した射殺事件である。両親は少年の逸失利益と慰謝料や弁護料など合計二千数百万円を請求した。法律による裁定はこれを認めるかも知れない。

不当な処置をうけて愛児の尊命が失われた場合、両親の悲しみ怒りのやるせない気持が、報復的手段となるのは人情の自然であろう。特別な諦観を持つ人は別として、慰謝料や損害賠償になることが多い。この記事を読むと、彷徨常習に持てあました不良児の平素の所業が、世間に数々の迷惑をかけたという詫びの気持が少しも見られない。ただ出来るだけ多くの時償金を取ればよい、法律上の権利を十分に行使すればよい、との考え方とも想像される。

親の気持をそういう解釈に持込むことも正常ではなかろう。然し厄介者が片付いて金が貰えると喜ぶ非情の例もあげられる。そこには口体を満足させればよい、少しでも安楽に贅沢な生活がかなえばよい、との無反省の欲望があるだけ。愛情のかけらもなく、神のかけも残されない全くのエコノミック・アニマルが存在するのみ。

実子をわざと自動車に跳ねさせる賠償金稼ぎの行脚もあった。無責任に生んだ赤児を駅のロッカーに捨てる流行、本年になって数十件。病人や幼児をおいてけぼりにして安逸や歓楽に走る婦人など数知れない。生きる権利をパリーで食物金銭ねだりに奮発する日本青年。頼みもしないのに生んだ親が、子に義務を負うのは当然とうそぶく娘の話も聞く。

経済大国は今の権利病蔓延の観がある。物質偏重からきた無愛情無節操が、恐るべき病毒を発生したもので、経世済民の大義に立脚した経済の話は、今く別の意味に横行している。

昔から用いられた諺「一寸の虫にも五分の魂」を考えてみる。律令や権力に屈従した時代は勿論理想ではない。圧制が忍耐の限界を超えた時、五分の魂は爆発した。血涙の百姓一揆は農民の抵抗、都市の争乱は民の反発、いずれも権利を主張したのではない。

今日は一寸の虫でも五分の魂が遠慮なく物を言う。識者は現代のわが国情は滅亡の道に在ると戒告する。権利の主張だけでは真の平和も繁栄も招来されない。列島改造は猛反省に起つことが最も肝要急務である。反省のない民族の滅亡した例はあっても、繁栄した例はないであろう。

（白雲）

阿蒙少言

趣味は？と聞かれてこが笑いをする。それほど現代人の生活内容には、趣味が必須の要件なのかと自問してみた。無趣味が趣味だとは、自慢にもならないが、それかといって今さら趣味をお義理で身につけようとは思わない○就職や縁談の身上書に、趣味は読書、とあるのは頂きかねる。ろくに本も読まないくせに、買わないくせに、こんなインチキが多い。若ければ知識慾があり、読書はあたりまえのこと。趣味は酒と麻雀、正直が買える○趣味に上品も低級もない筈。茶道とか華道とかいえば、一応花嫁候補としての株は上がろうが、茶華の道の源を探れば、利休は現代風を低俗と笑うかも知れぬ。贅沢な衣装に高価な道具、どこにも東洋的日本的なさびは感じられない。これも亦この頃よりの「自然に帰れ」が必要になってきた○通学のバスに多くの学生、長髪は自然に帰ったのか上古の風俗に戻ったのか、どうでもいいが本やノートをもち出して持つ流行は、学年の象徴のつもりだろうか。バックや風呂敷は減多に見られない。風呂敷に包めば、本が汚れないし、雨の日など勉作が楽というもの○風呂敷は実に便利なものと欧米人も感心と程である。品物の大小に応じて包み、不用の時はポケットに入る。自転車が見直されてきたので、やがて風呂敷も昔の風呂場用敷布の転身などの装雅にこだわりなく登場するかも知れぬ○趣味もそれに熱中したり自己表現の誇張になったりすれば、他人に迷惑。鼻持ちのならない大風呂敷をひろげて、才覚を披露する弁舌は悪趣味に属する○「先生、一引退後は何か趣味を？」「地球に用事がなくなったけれど、ついでだから生きている身の上、折々デパートを廻って買物する人間の表情を観てやる」。

第一四八回　宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切

宗像　中村　幸
徳く近くひとり来たる洗面所の窓に真昼の目がとまる

武丸　立石ろせ乃
手に持てる傘を揺してうるたえる吾に気付きて独り苦笑す

津屋崎　占部　由久
古里を離れて永く病院になつかしく思ふ田島放生会

津屋崎　菱花女
玻璃越しの杉山桧山美くしと旅の身浸す黒川温泉

宮田　片山　蹴子
いくばくかの卵をときに売りたりし日も香くて絶へしかの人も寡婦

大濠　江崎　琴子
朝な夕なたのしと見るにしき鯉餌は播かねどもむれてよりくる

宮田　北原　君子
ぬくみ持つ卵取りきて久に来し妹に持たせて心足らえり

東郷　白木うめの
ばあちゃんにやるとて幼が拾い来し栗のつぶら実手にあたたかし

武丸　原田まつ代
夕月のおぼろにさせる草むらに虫の啼く音のいとかまびすし

原町　八波　五月
グリーン車の切符に添えて日向路の秋たけなわと子の便り来ぬ

宗像　安部さつき
病床に点滴注射されながら思ひのままをきこちなく書く

津屋崎　麦野　時雄
とうきたる娘等子を連れて集い来る稲刈時の加勢をすると

吉武　早川　須磨
帰り来ばとりいもなく肌さらす我が落ち風の青田より吹く

武丸　原田　リノ
蚕光燈手元上寄ぬわが手きわ見らるる縁はいかと作らむ

戸畑　田中　ハツセ
八十の姑が使びし改良釜軒下に出され雨に打たる

宮田　片山　一
いこいなき意を聞こゆるバイパスの五万に近き車輪のこだま

津屋崎　内田　久美
ひと月の講習終えて帰り来し境内に山ぶどうの青き実有り

宗像　河村　久光
繁る山をそろの雨に濡れながら間なく紅葉になりゆくらしも

福岡市　吉田　信夫
嫁の留守をむずかる孫を抱きつつ婆々ううろうず泣きの止まねば

田久　小方　実
念願の仏壇買ひぬスイッチに燈がつくと子らのはしやぐ

勝浦　永島　文子
晴着の子もやい綱とりはしゃぎをり放生会詣りの島の人々

曲　天野トモエ
やわらかき無花果をもく足元の白くかそけき花こぼす紫蘇

深田　中野　節子
オランダ堀に沿いてれば一筋の町烏賊を干す暮る日和に

田島　吉武　武雄
笑顔して席を陽ひしバスの中見覚えあれど気づかぬまままに

徳重　石松やす子
捨てられしとは知らずして幾夜さも子を呼ぶ母猫の声に眠れず

田久　立花　勇雄
バインダー響交う午后を黙しつつ老二人刈る稲田の広し

香稚　桜井　ツ子
干柿の高さを越えてとろ赤び と日一花の大輪燈る

名残　竹原　圓
老人クラブの世話をしながらいつしかに吾れも古老の組に入りたる

東京　花田文五郎
玄海の潜き浜風秋深く心静かに波の音聞き

昭和造営誌執筆進む

―― 来年十二月上梓の予定 ――

境内に馥郁と菊の香漂う十一月十二日、当社遷宮記念大祭が多数の参列の下に盛大に斎行された。この祭典は去る昭和四十六年同月同日、特に畏き辺りより勅使御参向の下に、厳かに斎行された遷宮大祭の感激と慶びを何時までも後の世に伝えようとの趣意で、毎秋記念大祭として斎行することを決定したもので、今年で二年目を閲する。これと時を同じくして当社大造営事業も、完成以来早や二ケ年余の歳月を経た訳であるが、当時、関係者一同が一丸となって邁進成した本事業は、今静かに回想する時、現下の激動する社会状勢と対比して、正に時運と人の和に恵まれた天啓の大事業であったことが痛感される。

また、その壮大な規模と多額の募財、完成までの異例の速さ等は多くの神社造営に於ても稀有の偉業であり、また当社史の中にあっては昭和大造営として燦然と輝く金字塔であるといっても過言ではない。

この大造営事業の全容を明らかにして一般に公開し、更には未永く後世に記録として伝えるため先に「宗像大社昭和造営誌」の刊行が企図され、造営誌編纂委員会が設立された経緯については本誌に於て既報のとおりであるが、その後の進捗状況について簡単に紹介する。

編纂委員長より委嘱された執筆委員は、復興期成会関係者四名と当社神職五名からなり、それぞれ本務の傍ら時間を割いて執筆に専念している。今春より造営に関する厖大な資料を調査して取捨選択し、不足のものについては、当時の関係者から事情を聴取し、まとめつつある。

現在、各執筆委員は漸く粗稿を書き上げ、当社社務所に於て各自の原稿の読み合せ修正作業が、全委員出席の下に、二月乃至三日間に亘り終日行われているが、本造営誌を単なる工事報告書に終らせることなく永年に亘る崇敬の赤誠の結晶として血の通った記録書とすべく熱心な討議が交わされている。

また、斯界最高の学術書として評価の高い既刊「宗像神社史上巻」に遜色のない高水準のものを刊行することを目指して非常な苦心が払われている。

この後、来春には完全原稿として脱稿、直ちに印刷校正にかけ、来年十二月には上梓の予定でその刊行は関係者より多大の期待が寄せられている。

当社神璽　大聖教が奉斎

先頃、中津宮の神璽（みしるし）迎えの祭典が盛大に斎行された。この祭りは、特別に宗像大社神璽を奉斎させて戴き度いという依頼があって斎行されたものである。

依頼者は鞍手郡鞍手町室木に居住する飯野春子女史、彼女は幼少の時から病身であったが、当社の神を信仰、みちがえるように健康を回復した。

今後は益々当社の御加護を戴いて、感謝の真心を以って朝夕々々に御奉仕申し上げ信仰の道に一生を捧げ度いという強い信念を持つに至った。また同様な信念を以った者が、近頃近在に多く、その為にこれらの者同士が集まって会を結成し、これを大聖教と命名した。

飯野氏を代表とするこの大聖教では他にも多くの信者を集め、現在では五百余名もの信者を持つという。

その信者の願いによって特に当社の古代祭場、神離磐境の高宮に於いて祭りを斎行し、神璽を奉斎する運びとなった。先ず神璽迎えに先立って、去る十五日の吉日を選び遷霊祭が大島の中津宮において斎行され、神璽は暫時中津宮の神殿に奉安された。

かくして十八日、九州地方は寒波に見まれ、風は強くまた玄海の波は高く大島渡島は危ぶまれたが、代表の飯野春子他奉仕者一同四十名は渡海船（弁天丸）に乗って大島に渡島。

午前十一時中津宮において神璽出御祭を斎行。続いて神璽は更に玄海洋上を渡って田島の辺津宮の高宮祭場に悉く安置された。

午后二時高宮祭が当社神職の司祭のもと厳粛に斎行された。

祭典終了後、一同は当社の出張使館で神酒拝戴、湯茶の接遇を受けて午后五時、神璽はうやうやしく奉持されて大聖教の里へと還御された。

石油危機の教えるもの

対岸の一次災と見られていた中東戦争が、まさか別の形を以て日本経済を揺がす事態を引き起こそうとは、何人が予想したであろうか。

周知の通り、アラブ諸国は、イスラエルに加担する西側諸国に対して石油を政治的武器として牽制。

月毎に五%ずつ産油の供給カットを増し続けており非資源国の日本は、得体の知れない不気味な様相に見舞れてきており備蓄の減少につれて愈々余断を許さぬ経済状態をみせている。

しかも、問題の根幹が、中東に於いて過去何千年に亘る宗教的問題に民族間の抗争と利権がからんでいるとあって、金銭の力では解決の難しい問題であろう。

かって経験したことのない此の異った現象の展開は、我々に多くの反省と教訓をもたらすものではなかろうか。――資源をもたないのに、GNP世界第二位だと驕り、物質繁栄を追求するばかりで精神面を軽んじてきた従来の政経の姿勢、また何事も金銭で物事を押通そうとする風潮、神徳の恩恵を忘れた人心に対する天からの戒めであろうし、贅沢を排し、節約の美徳を覚まさせ人間の生き方そのものに対して官民一体となって国をあげて問いかける天の配剤なのかもしれない。

寸言

総理大臣のおなら

放屁一発といっても色々な場合がある。犯人も被害も一様でない。純真な赤ん坊の出した音、茶の間に微笑を呼ぶ。厚顔なおやじの暴発。その心の罪深く同様に鼻持ちがならぬ。番茶も出ばなの十八娘が心ならずも誤って落した妙声、聞いて聞かぬふりは武士の情という程大袈裟でもないが人情味ある思いやりであろう。

総理大臣の「おなら」が一発千金どころか、天下の人を安心じた話になると、茶の間から日本列島全域の事件に飛躍する。総理大臣といっても栄作さんや角栄さんのことではない。彼等のおならが天下の人心にいささかの影響があろうなどとは、とんでもない物笑いが残るだけ。

国民の多くが待ち望んだおならの主人公は、浜口雄幸首、であった。数年年前政界に政友会と民政党の二大政党が対立していた。浜口民政党総裁はたった一週間のお休を頂いて宰相の印綬を帯びていた時、愛国を看板にする青年の狙撃に狙われた。入院手術の後、主治医が放屁さえあれば二命は助かる気がする。それが世論の動向にも人間味を悪かに感じていたようである。当時満鉄総裁をしていた仙石、という老政客とのいきさつを例のない総理大臣のおならが出るかどうかに集中された。

漫筆明暗箱 (9)

当時の世情は今まとギクシャクしたものではなかった。政党の対立や選挙の腐敗にかかわらぬ人間臭い味が一般に強かった気がする。それが世論の動向にも人間味を悪かに感じていたようである。当時満鉄総裁をしていた仙石、という老政客とのいきさつを踏襲した狂歌を面白く読んだ記憶がある。犯人も被害も一様でない。純真な赤ん坊の出した音、茶の間に微笑を呼ぶ。厚顔なおやじの暴発。その心の罪深く同様に鼻持ちがならぬ。番茶も出ばなの十八娘が心ならずも誤って落した妙声、聞いて聞かぬふりは武士の情という程大袈裟でもないが人情味ある思いやりであろう。

総理大臣の「おなら」が一発千金どころか、天下の人を安心じた話になると、茶の間から日本列島全域の事件に飛躍する。総理大臣といっても栄作さんや角栄さんのことではない。彼等のおならが天下の人心にいささかの影響があろうなどとは、とんでもない物笑いが残るだけ。

国民の多くが待ち望んだおならの主人公は、浜口雄幸首、であった。数年年前政界に政友会と民政党の二大政党が対立していた。浜口民政党総裁はたった一週間のお休を頂いて宰相の印綬を帯びていた時、愛国を看板にする青年の狙撃に狙われた。入院手術の後、主治医が放屁さえあれば二命は助かる気がする。それが世論の動向にも人間味を悪かに感じていたようである。当時満鉄総裁をしていた仙石、という老政客とのいきさつを踏襲した狂歌を面白く読んだ記憶がある。

瓦斯は国民の待望に応えぬもたく出た。雄幸首、は一度は回復したがその後の運命は長くなかった。政治の要諦が民心を安んずることにあると古聖賢の教えから見れば、この時の放屁一発はまさに天下の憂えを除いた貴重な快音と言えるだろう。

政党の対立や選挙の腐敗にかかわらぬ人間臭い味が一般に強かった気がする。それが世論の動向にも人間味を悪かに感じていたようである。当時満鉄総裁をしていた仙石、という老政客とのいきさつを踏襲した狂歌を面白く読んだ記憶がある。

首相のおならの頃は国情もまだ危機感を覚える彼岸はなかった。

が残っている「おさち（雄幸）なが、五一五事件、二二六事件と経過して、斎藤実、犬養毅と首相等の非業の最期が頻発して「国民鶴首のおなら待ち」などの報道も影をひそめ、平家に非ずんば人に非ずの伝に似た軍服はなやかな軍国主義へ移行した。悲しむべき暗黒時代へと続いた。

そして遂に春秋に富む青年を人間魚雷や特攻隊に乗せて、減死奉公の名のもとに残酷な死地に送いやった。まさに祖国忘却の偽思が、さまざまの美名かむって横行したのである。

その頃のおならの話を拾うと、肩で風切る将校達は驚放磊落な快男児を気負って処かまわず放屁し粉骨砕身の気概が生れる筈がない。偽せ物ほど大声で歩く。

首相のおならの頃は国情もまだ危機感を覚える彼岸はなかった。

珍しいことではないが、総理大臣のおならの前には彼の愛国の正義の売り声も一向に反応はなかった。そんな看板を広げり走り走り刺客、いつの時代にもある事件で気取る輩にほん物は居ない。石鹸を食い物にするダニ幹の中に真に

◇社務日誌抄◇

十月二十日　神湊郵便局ジャンボ旅行友の会、その後発会式
十月二十二日　菅屋航空自衛隊五十名参拝
十月二十三日　宗像町家庭教育学級五十名参拝
十月二十四日　出光本社総務部戸田文書課長来社
鹿島建設若小牧出張所々員参拝
菊花展準備の為都内酒工会有志三十名奉仕
十月二十五日　出光福岡油槽所竣工式、宇都宮祢宜、石橋、宮崎出仕奉仕
十月二十七日　宮司、山田権祢宜菅屋航空自衛隊十二年記念式典に出席
十月三十一日　出光徳山出光会三十五名参拝
出光店主室教育生二十八名参拝
出光米子支店長橋野氏外一名参拝

大内弘世　その四

幕舎の中で子俊は大内義弘を引見した。

「その方父子の忠勤は嘉賞にても名高いこと、近ごろは口さがない京童まで、西国に大内ありともはやしよう、また此の度の九州下向にあたっての御手配全く勝けない」

と労いの言葉をかけ一通り九州の宮方の動向を聞き

「実は先般大内家の添書を持参した趙秩なる僧に会ったが、その折の話で、只今大内家に寄遇している宗像家臣井上某なるもの彼奴の口ぶりでは明の張士誠の遺児である様子如何なる男かな」

問われるままに、戦さの採配は、発に優れ再三にわたり菊池を窮地に陥れ、その武略は九州に名高く、筆をとっては詩文をよくし、父弘世も当今稀なる大器と賞揚している」と告げた。

「それほどの男が何故」

「いや大したことではない。この数日来の貴公等の話を聞いてそれをまとめただけのことよ」

それから今後の軍略について説明を始めた。昨日あたり新探題は大内領へ入られた。これで瀬戸内海賊の脅威はなくなった。そこで吾等は門司関に集結している宮方の軍船を駆逐することになる。しかしこれと正面から戦えば敵も充分な備えがあるし戦力も多大の損害をうけるは必定。

「戦はすして敵を追い払う、そんな妙案がありますかな」

「ある！」

草刈満房が問いかけた。

「豊前国柳浦、宮方の宇佐大宮司の所領中唯一の港である駅館川の川口に開けたこの港は肥沃な宇佐平野を背后にひかえ古くより殷賑を極めていた。港としての欠点は周防灘に面する海岸の遠浅で干潮時には一里位沖まで干潟になる」と言う。

「貴公等の話を聞きこの地図を眺めると、今門司関に集っている兵船は凡てこの柳浦より発した宇佐大宮司殿の手の者と見ゆる。しからばその本拠を叩けば国幹に引返すに相違なかろう」

一同もこれに合点した。なる程豊後の高崎城より来たにては船の往来もはげしし、また宇佐の巴の紋をつけた旗差物も見えると言う。

幸い風は追風、夕焼を背にして周防灘を横断し明朝満潮に上陸し半刻の間、家並に次をつけ引き潮に乗って岸を離れれば一里あまりの干潟を渡って追撃する敵もなかろう。勝ると目算がつけば串崎海賊の動きは速かった。ただちに各自の船団に帰り兵糧を作り武器を調え、日没を待った。

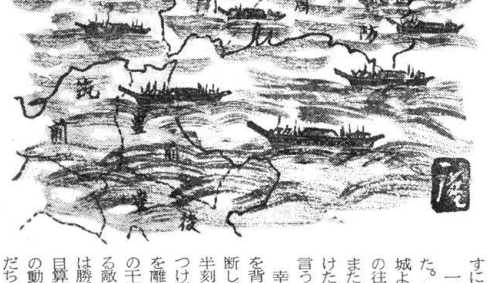
空も海も茜色にそまる頃、串崎船は一艘また一艘と入江を離れ周防灘に漕ぎだした。門司関の敵の着任を阻害せんとして門司関に集結した宮方の軍船は、愈々その数を増し周防灘方面より海峡を窺う海賊の脅威はなくなった。そこで吾等は門司関に集結している宮方の軍船を駆逐することになる。しかしこれと正面から戦えば敵も充分な備えがあるし戦力も多大の損害をうけるは必定。

「戦はすして敵を追い払う、そんな妙案がありますかな」

「ある！」

草刈満房が問いかけた。

豊前国柳浦、宮方の宇佐大宮



驚嘆の声を一人が放った。

「いや大したことではない。この数日来の貴公等の話を聞いてそれをまとめただけのことよ」

それから今後の軍略について説明を始めた。昨日あたり新探題は大内領へ入られた。これで瀬戸内海賊の脅威はなくなった。そこで吾等は門司関に集結している宮方の軍船を駆逐することになる。しかしこれと正面から戦えば敵も充分な備えがあるし戦力も多大の損害をうけるは必定。

「戦はすして敵を追い払う、そんな妙案がありますかな」

「ある！」

草刈満房が問いかけた。

豊前国柳浦、宮方の宇佐大宮

こうのみなと湊

(34)

楠早鳥作
福田長庵画

「宗像路散歩」を刊行

―上妻国雄氏自費出版―

宗像郡の史蹟と伝説を紹介した冊子「宗像路散歩」が刊行された。著者は宗像郡津屋崎町在住の上妻国雄氏である。

同書は宗像郡の史蹟、伝説のガイドブックともいうべきもので、初めて宗像の地を訪ねる人々にとっては格好な手引書である。

氏は既に「宗像伝説風土記」（続宗像伝説風土記）を出版されており、これを取舎選択し、史蹟、名所の解説を加えて編集したものが同書であるともいえよう。

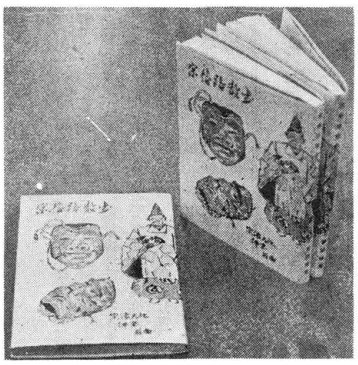
変貌しつつある宗像各地を適切に採録しているので宗像在中の人々は勿論、宗像出身者にとっても好個な読みものとなろう。

小冊子の割に内容が豊富で、各町村別に編集してあり、関心のある個所を拾い読みするにも便利である。

史蹟の詳細を知るには、少々不満の向きもあろうが、先ずこれによって概略を知り、次に同書末尾に掲げた向文参献を参照することを勧めたい。

参考のため同書の目次を列記する宗像町の史蹟と名所、日の里団地大井ダム、東郷の町、宗像高等学校、荒廃した郷土館、東郷の民話・伝説、旧街道の宿場原町、大穂の宗生寺と観音堂、沖ノ海関、許斐城跡と中津文庭博、野坂の太鼓田植、朝町の宗像カントリーゴルフ場、南郷の民話・伝説、維新の志士草川勇、八所宮、孝恵武丸正助翁、吉武の民話・伝説、赤間宿と五卿西遷の跡、節婦阿政、森都市、福岡教育大学、高宮城跡、貞婦はんの碑、東海大学、赤間の民話・伝説、須恵窯跡、山田地蔵尊、河東の民話伝説

玄海町の史蹟と名所、宗像大社、鎮国寺、田島の民話・伝説、池田炭坑跡、上古の街道、池野民話伝説、氏貞公墓、佐屋形山と絨幡神社、沈鐘伝説、地島、勝浦、さつき松原、江口港、五月浜、玄海ゴルフ場、神湊の街、陸船寺、草崎城跡、弥五郎公園、肉落、神代焼



附属水源、実験所、津屋崎人形、宮地嶽神社、六百体之碑、製鉄団地と日生団地、津屋崎の民話伝説、大島村の史蹟と名所、天の川、中津宮、天の真名井、安昌院、宗像宿と五卿西遷の跡、節婦阿政、森都市、福岡教育大学、高宮城跡、貞婦はんの碑、東海大学、赤間の民話・伝説、須恵窯跡、山田地蔵尊、河東の民話伝説

玄海町の史蹟と名所、宗像大社、鎮国寺、田島の民話・伝説、池田炭坑跡、上古の街道、池野民話伝説、氏貞公墓、佐屋形山と絨幡神社、沈鐘伝説、地島、勝浦、さつき松原、江口港、五月浜、玄海ゴルフ場、神湊の街、陸船寺、草崎城跡、弥五郎公園、肉落、神代焼

奥の院と牧場、神崎の灯台と馬蹄石、沖ノ島

津屋崎町の史蹟と名所、海の中道、恕照と恕智院、勝浦氏と名児山、新原を中心とした古墳群、百塚、勝浦の民話・伝説、順多田の薩長雪と在自の有干潟、金刀比羅、社とお夏大明神、万松山新泉寺、六人土首塚、塩田開祖大社元七の墓、東郷公園とその史蹟、瑪瑙神社とお菊御さま、渡半島の景勝、津屋崎海水浴場、九州大学農学部

福間町の史蹟と名所、福岡厚生年金スポーツセンター、饗生ケ浦、花見松原、諏訪神社、亀山城跡、舎利蔵の勝宝寺、斌前竹橋（一説B六版、一九七頁、限定出版、井上勝次著、本木の化け物、宝林寺と三恵法師、宝林山と板碑、上西郷民話伝説、畦町の宿駅跡、米一丸母の墓、五卿休息の跡、畦町の道標、移り変わる神興の果樹園、神興神社、神興の民話伝説

起工式

宗像町公民館

―河東小学校跡地に―

去る十月二十五日、午前十一時より宗像町公民館新築工事の起工式が、日本国土開発株式会社によって盛大裡にとり行われた。

宗像町公民館は、宗像町大字河東の旧河東小学校跡地に建設するもので、当日は由良芋三郎宗像町長始め町議会議長、県会議員、宗像町各公民館長、宗像町教育委員長各界知名士を始め一般参列者多数が出席し、町長に続いて各代表が玉串を捧げ敬虔な祈りを捧げた。

宗像町公民館は、宗像町の総合公民館として広く町民に利用していただき、地域文化の向上に寄与しようと建設に至ったもので、工事が順調に行けば来年五月に宗像町のシンボルが誕生することになる。

なお日を同じくして、宗像町赤間の城山中学校増築工事の起工式が行われ、各関係者が玉串奉奠を行ない式典を終了した。

◇

宗像町公民館新築工事概容

揚所　宗像町大字河東
構造　鉄筋コンクリート三階
建
総面積　一八六二平方メートル
一階　図書室、調理室、和室（2）茶室、児童室、クラブ室、談話室、町民ホール他
二階　大ホール（四一五席）会議室、講議室他
三階　映写室他
竣工　五月二十日予定
施主　宗像町
施工　日本国土開発株式会社

恒例の献茶、献舞行われる

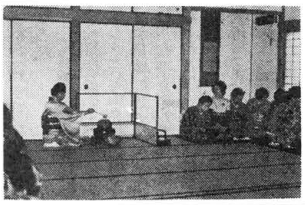
錦秋の十月十七日、好天に恵まれ恒例の表千家家元献茶並びに井上流家元の舞奉納が宗像大社拝殿に於て行われた。

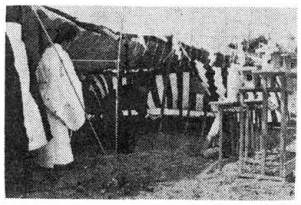
この日、早朝から境内は色とりどりの晴着姿の婦人達で賑わい、稽物ショーの観もあった。

午前十一時、当社勅使館で更衣を完えられた表千家家元千宗左氏若宗匠一行は、手水の後祓舎でお祓いを受けられ拝殿に宴殿、祭儀とお前が初められた。

拝殿前握舎に設けられた拝観席は約の余地のない程婦人達で埋まり、静寂な中にも緊張した空気が流れる内に濃茶、薄茶がたてられ、楢の葉を浮かした茶碗が神前に供えられた。お茶の香りが境内一面に、う内に献茶祭は終了、引続いて井上流家元井上八千代さんが舞殿、神前に一礼の後、地唄「菊」を舞われた。昨年の「倭文」と趣きを異にし、京舞独特の振りがあり、名手の舞振りは一同を完全に魅了した。

午後からは、斎館及び宿衛舎で副席が設けられ、参会者は三々五々秋の境内を賞でながら楽しい一時を過した。





中津宮廻廊にカラー写真を奉納

―福岡市の秋吉氏―

去る十月十日、福岡市東区吉塚の秋吉林（51）さんは、当社中津宮神門脇廻廊に秋季大祭模様のカラー写真二十数枚を寄贈されたこの写真集は、秋吉氏が数年前から撮影したフイルムの内から秋季大祭模様をピックアップしてまとめたものである。内容の主なものは次の通り。

大島から沖ノ島の神迎えに出発する御座船、絶海に浮かぶ沖ノ島潔きする神職と総代、大島中津宮流鏑馬、奉納される風俗舞、浦安舞生会に奉納される風俗舞、放流鏑馬、奉納中学校対抗相撲大会中津宮秋祭り、大島遥拝所に参拝する参詣客。

このように当社秋季大祭の最初から終了までの要点を写真で展示しているが、ここ迄完成された秋吉氏の苦心は大変なもので、沖ノ島の写真等は悪天候と船酔いに悩まされながら撮影されたものである。

写真は四つ切大で、額縁に入れて廻廊に掲げられており、中津宮参拝者と好評を博している。

×　×

話題の新車をみる（57）

新型ファミリア・プレストの巻

中東の石油削減によるあおりは、我国経済に痛烈な打撃を与え始めており、電力・鉄鋼・ガソリン等の不足も危ぶまれ、自動車産業としても、頭のいた見踏み状態がかなり続くものと思われる。

燃料の無いガソリン乗用車をいかに心配してみたところで、危惧が直ちに去るものでもない故、ガソリン問題は別の項に譲り、毎回の通り、話題の新車を紹介したい。今回は"ファミリア・プレスト"である。

最近の傾向として、サニーやカローラ等一所謂大衆クラスの乗用車は、モデルチェンチの度毎に、サイズも排気量もスケールアップしており、初期のモデルと比べると、凡そひと回り、二回りもグレードアップになっている。つまり大型化とぜいたくムードばかりが強調されてきたのである。

そんな中にあって、ファミリア・プレストだけは、マイナーチェンジによって内容の充実化に意を注いできたものの、基本的寸法は長く間、変更されなかった。

走行安定性・居住性に重点をおいた今回のプレストのマイナーチェンジは意義深いものがある。即ち、上っ面の目先を変えるよりも、実質的な改良にいいをつけた思想がよく打ち出されている。

目立たないまでも大きな変身をしており、特に改良点のハイライトは、全長全幅をそれぞれ六〇㎜拡大、全高を五㎜位低く、安定感のあるプロポーションを実現しており、ニューデザインを取入れたフロントグリル、すっきりとしたリヤヴュー、ワイド化した車幅とルーフラインとの美しいハーモニー、テールランプはシンプルかつワイドな印象を強調したものに変った。

機構構成はセダンとクーペのそれぞれ1000ccと1300ccエンジンが用意され、合計十三機種を数える。

エンジンは変更なく、水冷直列四気筒、OHCは一二七一CC、圧縮比九・二、最高速度一五五Km/H、八七PS/六000RPM、低速での粘り強さはマツダ製エンジンの伝統でクラス特性にあわせたトルク特性を持っている。

室内については、まずインパネはブラックで統一され、何よりもシンプルなデザインで、中央にラジオとベンチレーション・ヒーターの操作パネルが配され、計器盤は左からコンビネーション・タコメーター・スピードメーターが丸型でまとめられている。コンビネーションスイッチは、一本のレバーでウインカー・ビーム切替え、パッシングライト・ワイパー切替え・ウォッシャー・駐車灯の六種の操作が可能。

HC対策としては、燃料蒸発制御装置、ブローバイガス還元装置、減速時の混合比をコントロールしてOHの排出を低減させるスロットルオープナーを装着、新設計の点火時期進角装置を施すなど、四十八年度の排出ガス規制にも余裕をもって合格している。

宗像史蹟（四）

宗像の古城（三）

一、

宗像領は十五世紀から十六世紀を通じての戦国期は、初め周防の大内氏に属していたが、大内氏滅亡後は、その主家を滅した陶晴賢が豊後大友氏と親睦の間柄である関係から第七十九代大宮司氏貞からは大友氏と和睦した。しかしその後陶晴賢が毛利元就に敗島に敗戦してからは毛利氏の幕下になって大友氏と敵対関係となって、たびたび戦を交えた。その毛利元就が中国の平定を終えると、大内氏になって北九州に進出するのは永禄年間（西歴一五五八―一五六九）である。元来北九州の博多周辺は宗像、原田、秋月、麻生、筑紫氏等の小豪族が少弐、大友、大内氏をめぐって各自家の利害得失により去就し、小さな戦は絶え間がなかった。ことに粕屋の立花城をめぐる大友氏対毛利氏、大友氏対島津氏の攻防戦に宗像家も大友、又は毛利に属して参加した。

宗像氏貞が大宮司となってからは大宮職は（天文廿一年西歴一五五二年から天正十四年西歴一五八六年まで）戦国争乱の最も激しい時であったので、宗像家では最も多く合戦が行なわれ、また都内各地に城郭の築かれた時代であった。氏貞は器量才覚共にすぐれ、家臣達も宗像のために未だのもしく、よくかしづき、成長するに従い知能も人並み以上に勝れ、身長も高く、力強く文筆に秀で、まこと に文武の達人であった。この英傑氏貞の一代こそ、前にもその戦績の二、三を紹介したが、宗像で最も花々しい戦国絵巻を繰ひろげ、宗像魂ともいうべきものが発揮された時代であった。

二、

宗像の城郭は戦国期のものが大部分を占め、日本城郭史上で、城郭としての価値をもつのは鳥ケ嶽城、白山城をあげることができるが、その他には居館としての意義が深く軍事的意味は少ない。よって城址として、遺物を今日探索しても皆無のものが多く、本城たる鳥ケ嶽城、白山城の出城、又は番所程度のものであった。

次に名称、所在地、関係人物、年代、関係事項及び現状の一部について表示して参考にいたしたい。（以下次号）

久留米工業学園
短期大学助教授
田中政喜

酒処

「雪の里」本舗

雪の里酒造株式会社の巻（10）

筑紫次郎の別名で知られる筑後川とその支流たる小石原川、佐田川に挟まれた、日本三大名水地の一つに数えられている甘木市の菩提寺の地に吟醸銘酒「雪の里」醸造元、雪の里酒造株式会社を訪ねてみた。

「雪の里」の沿革史によれば、明治二十五年久留米絣製造業遠藤重平氏の四男として生れた遠藤政次氏が昭和八年分家して現在地で雪の里酒造場を創設し酒造業を開始した。昭和十四年北支通州工場を設置し軍用酒造業を始める。同十年企業整備、同二十年久留米市出向合名会社の権利を買収して酒造業を再開、同二十三年法人改組雪の里酒造合名会社を設立、遠藤政次氏代表社員となる。同二十六年資本増資。同二十八年佐賀県有田町の白磁泉酒造株式会社を買収。同三十年自己企業分復活。同四十二年喜楽酒造株式会社を合併、同年現称号に経営組織を変更し現在に至る。又翌年には大規模な企業整備を行ない、自動製瓶器、自動紙器、搬詰工場等最新式省力的機械を導入した。

商標「雪の里」は創設者政次氏が、清らかで、淡麗で暖かな古里の味がする甘口の酒を造りたいと

軟水仕込の清酒「雪の里」と命名した。

よく男性的な酒だとか、女性的な酒だとかいわれるが、酒の味がにごりかでキメが荒く、こしがあり、線の太いしっかりした酒が男性的な酒であり、これと反対に締麗で軽く、上品で淡麗だが、さびしい酒が、女性的な酒といわれている。この男性、女性の差は主として仕込に使う水に関係があり硬水（難の宮水が代表的）仕込の酒は、絞りたては柔らかく、女の肌のように滑らかな感じがする。と一般に言われている。

清酒「雪の里」は厳選された朝倉産の酒造好適米を丹念に磨きあげ、清らかな甘木名水をふんだんに使い、伝統を誇る技法と最新技術の巧みな調和から、入念に作られている。又同会社では、創立以来つねに品質の向上と、酒造技術の研鑽に努力を重ね、完備した最新の設備から生れる酒には、一貫して行き届いた品質管理が行われている。現在醸造高一万石、販路は県内を始めとして長崎県、大分県、東京都等である。

×　×

宗像大社歌会

俳句作品集（一三〇）

土用穴　八尋　恒夫

夏未立空に浮出た上り雲

津屋崎　菱　花　女

天高し憩へる牛の眼澄む

吉留　伊豆　湧泉

林道暗し阿蘇杉の秀に秋の空

藤沢　玄　洋　子

ふるさとの囃子なつかし秋祭り

東京　小浦　太平

王朝の夢玉虫の秘むるかに

福岡　入江　柳江

厨で心たのしく虫の宿

東郷　有吉　春子

乾草をよせて十勝野荒れやすき

田熊　安部　ゆき

初秋刀魚吾好物と買ひし嫁

東京　小浦　太平

木場の神送る木遣のひびきわり

宗像神社沖津宮祭祀遺跡

昭和四十四年度調査報告

沖ノ島

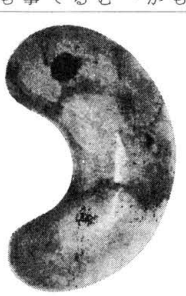
○古老の伝承（36年8月）

佐藤市五郎　75才
河辺嘉十郎　70才
ねずみ—イナカ　猥—カキヨウ　ねずみの巣—イナカノショロウ　岩・石—マリヤ　醤油—タマリ　或木の名（その本名を知らない）—白ヨーセ　黒ヨーセ　すら（陸上の船をすべりやすくする為にその下に敷く丸木）—ヨーセ　米—シャリ　大便—ゴーヤ　大便をする所—ゴーヤバ　出産—赤不浄　死亡—黒不浄　その他色々の場合に「ヨーセ」という言葉を使用したそうである。例えば血が出た—ヨーセが出た。死んだ—ヨーセした等。又、沖ノ島の事をオイワズ（不言島）様と特に称えている。

以上沖ノ島では他の場合と同じく古来「シ・ス・チ」の音を忌んだと言われているが、右の例でも分るようにこれらの音をさけんが為のもの多いわけである。又、三社縁起に「此島にては神事をむねとし侍れば、神事にけがれある物をいみて、まさしき名をいはで名をかへていふ」とある様に神事にけがれあると思われる物体をもそのままの呼称をさけているのである。

或は不吉不浄に関係なさそうなものにまで忌詞を使用したり、更に忌詞を使用する必要のない忌音のシ・ス・チを挿入した忌詞があったりして、私には解せない点が多いのであるが、防人日記に云う如く「今その他色々の場合に「ヨーセ」ていやしき」為ばかりなのであろうか。

実は、私はそうした忌詞が、歴史的というのか、民俗学的というのか、何か隠された意義があり、そのように昔から感じていたのである。



5、沖ノ島忌詞の概説

①逆説的使用例
小便—アマケ　尼—かみなが（髪長）

これらは神事にけがれがあるとして、反対の詞を設定したという以外には深い意義はないと思われる。

②古語慣用例
味噌—ヒシホ　醤油—タマリ　大便—ゴーヤ

便宣上ここに三省堂発行の金田一博士の「辞海」を繰ってみると、「ひしほ」はなめみその一種、「タマリ」はミソからしたった液、又たまりじょうゆつと誌してある。尚、柳田男監修東京堂版の民俗学辞典では「ひしほ」について次の記事がある。

「……なめものとして奈良県に麦をつくるヒショウ味噌というものがあるという。中世のヒシホの系統に属する名称である。醤は今日の味噌や醤油に先行した調味料で、醤油をタマリそれを売る店をタマリヤという地域は広い……調理に醤油を使うのは盆と正月ばかりで……最初から醤油にする目的で作ったものである……。」ひしほ・タマリ共に相当に古い語であり貴重品であった事が知られる。「ゴーヤ」は「辞海」に廁（カワヤ）と誌してある。尚、柳田国男の「地名の研究」には壱岐・琉球では現在も大便のことを「ゴーヤ」と言うことを記している。

③外来語転用例
米—シャリ　酒—チンタ

「辞海」に「シャリ」とは仏舎利の意の外に、死がいを火葬に附の。又色が似ているから「こめつぶ」白米と記してある。金沢章三郎博士の研究では朝鮮の古語で米を「シャリ」というといわれているが、元来の朝鮮の古語であるのか、仏教の伝来と関係して梵語の舎利が古代の朝鮮語に混入したものであるのか。我が国でも以前から隠語的につかわれてきた「シャリ」（米）は日本語でなく外来語の一種とみてよいのではなかろうか。

私は支那事変前、沖ノ島在勤中よく漁師から聞いていた酒のことをチンタという沖の島の忌詞をすっと不思議に思っていた。昭和13年、戦地でたまたま読んだサンデー毎日に、小説家海音寺潮五郎氏の「オランダの旗」という小説の中に、チンタはオランダ語で酒の事だと書いてあった事から長年来からみても。（つづく）

先年黒板勝美博士の「国史の研究」を読んでいると、外来語の項にチンタは赤ブドー酒で原語はポルトガル語と記してあるのを見て「辞海」を繰るとやはり同じ様に出ている。いずれにせよ「チンタ」は日本語ではなく、ヨーロッパの言葉であることにまちがいはない。

沖ノ島の忌詞で、「シ・ヤ・チ」をきらうのに、わざわざ「チ」のつく外来語を持って来て、これを使用するということは、何故だろうか。これは古来の忌詞ではなく「防人日記」の「海人が定めると覚しくていやしき」ものの様であるが、私は沖ノ島の忌詞の中でこれらが目下思考の中心になるわけである。

6、沖ノ島忌詞の歴史的意義

わが国最古の「古事記」や「日本書紀」の中に、すでに宗像神奉斎の事が記してある沖ノ島は、いかに古くから知られているかが分ると同時に、記紀に録る如く、記紀成立以前に於いて、朝鮮から或は朝鮮を通じて中国から、大挙して渡来した民族があった歴史的事実からみても。（つづく）

四島一二三伝

二宮住天蓋主人

——原田種夫著——

四島青年は三カ月の休暇をもらい、有効期間六カ月のマニラまでの往復一等切符（三五〇ドル）を買い、マニラから香港、上海をへて日本へ向かった。不安と焦燥の苦しい旅であった。一刻も早く危篤の父のところに着きたかったのだ。船腦が馬尻に逆いように思えて、しじゅう、いらいらした。故国へ着くまで父よ生きてあれ、としきりに祈った。せめて父の死に目に間に合うようにと一心に念じつづけた。

ようやく、汽船は二十日以上かかって横浜に着いた。そして二日目に、なつかしい故郷の金島村の土を踏んだ。明治四十年、二十七才のときであった。故郷の姿のなつかしさ、野も山も川もすべて昔のままであった。十年ぶりにふれる、ふるさとの風と光と木々の姿に胸が熱くなった。まさしくふるさとの懐しい匂いであった。不安なもちで、金島村の自宅に入った。みんな喜んでかれを迎えたが、その中に元気な父の顔があったので四島青年はびっくりした。

「お父っさんは病気じゃないのか」

「病気じゃないよ。自動車事故でお前が死にかかったという新聞記事をアメリカから送って来たので、じつは、父危篤という電ないとお前は帰ってこん思うからよ」

兄の平太郎が笑いながらそう説明をした。笑い話ですんだからよかったのである。母のミエさん、藤次郎兄、弟の伊兵さんに喜五さん、妹のあさをさん、一家そろって元気な顔が揃っていた。十年ぶりに見る父母兄弟の顔であった。

その内に、村の同窓生たちや先輩も集まってきて夜は大へん賑やかな歓迎会になった。四島青年は、アメリカ人のこれまでの生活を皆に話してきかせた。未知の世界の事どもが珍らしくて、皆目をすまして熱心に聴き入った。みんな見たこともないアメリカのことを聞くのが珍らしく、四島青年の話すことが面白くてしょうがなかった様子であった。

四島青年は、故郷金島村でぶらぶらと一カ月あまりを過ごした。じっとしている事を好まないつねに行動的な青年は、一日も早くサンタポーラ・キャンプに戻りたかったにちがいない。しかし、そう思う一方では、幼い日から魚釣りをしたり、泳いだりした筑後川の流れや、鎮守の森や、雲雀を追った畑や、レンゲ草を摘んだ田の畦を見ると、幼い日の郷愁がもどってきた。十年も見なかったふるさとの風物は、筑後川の改修工事によって、家の位置こそ変っていたが、あたりの風物は昔のままであった。久々に映ぶる郷の土の匂いであった。かれは、一人で金島村の周辺を歩き廻り念を入れていろんなものを見た。そして深く瞼の奥にその印象を灼きつけてアメリカに帰ろうと思った。故郷の山河を愛する心に通じるものだ。

同窓生たちの歓迎の宴もつづいた。そういう席では、昔のままの「市ちゃんよい」がでた。それも、一二三と改名したことは知らないのであった。同窓生はみな逞しい青年になっているけれども、どこかにいたずらをしていた頃の幼な顔があった。そして、「おい」「貴様」「おれ」という言葉が生きていて、よそ行きの言葉がない。ほんとうに古い友人はよいものだ、ふる里はよいものだと四島青年はしみじみと思った。

けっきょく、アメリカで奇禍に逢わなかったならば、十年目に故郷に戻るということもなかったのである。また、じぶんの子が奇禍に逢って助かったことがわかっていても、それをじっさいに目で見て確認せねばいられなかった父母の心情のありがたさが身に泌みて嬉しかった。故郷の人びとも、四島青年は、仕事のすべてを打ちこんでわき目をふることがなかった。いつも強い正義感に立って、事を処理するにも一片の妥協を許さない強い意思がだんだんと形成されていた。頑固ともみえる、その直情怪行というのは、まさにもなく明治の精神であったろう。（つづく）

第九章人さまざま

ふる里の匂いを身につけて四島青年は、サンタポーラキャンプに戻って来た。仕事の鬼と言われた四島青年は、仕事にすべてを打ちこんでわき目をふることがなかった。いつも強い正義感に立って、事を処理するにも一片の妥協を許さない強い意思がだんだんと形成されていた。頑固ともみえる、その直情怪行というのは、まさにもなく明治の精神であったろう。（つづく）

心からなる歓待をしてくれた。帰国してよかったと拝みたいくらいであった。心のこもった壮行宴が、いくつか続き、四島青年はなつかしい金島村を後にして横浜から帰米の途につくことになった。再び故郷に帰る日は、もっともっと立派な人間になって、いわゆる故郷に錦を飾りたい、いや飾らねばならぬと深く深く心に誓ったのであった。

見聞記

韓国一人歩き

イムジンの光景を回想しながらホテルに戻り、ソウル最後の夜を過ごす。

久しぶりに降ったと云う小雨の午後、釜山行きの二階建高速バスに乗ってみた。

余談になるがソウルに向う時は普通の高速バスであったため、特別な感じはしなかったが、帰りは乗る事は勿論、実際に見るのも初めてだったので興味津々、早速二階の最後部に席を取った。

駅を離れるとすれ違う自動車がかなり下方に見え優越感?を感じさせるが何んとなく落ちつかない。

しかし思った程揺れもなく、馴れてくると快適なドライブ気分に変った。

高速バスは、ソウル・釜山間に只一カ所ドライブインに停車（十五分間）するだけであとはノン・ストップで飛ばす。

読者に一笑されるかもしれないが、ドライブインに停車した時、喉が乾いたのでビールを注文し、一口飲んで時計を見るとすでに十分経過、あわてて残りを飲み干し表へ出たら、はて困った。乗ってきたバス以外止まっていなかったのが五台になり、しかも同じマークの同型車。

"これも違う"、"これでもない"と走り廻っていると後ろから車掌さんが肩をたたき

「こちらですよ、早く乗って下さい」

といった仕草。恥かしいやら、てれくさいやら、まして最後部に乗っていたため全部の乗客といやが上にも顔を合わせねばならず、赤面の至りであった。

釜山に着いたのがかなり暗くなった八時過ぎ、親切なポリスマンの案内で市内に宿を取った。

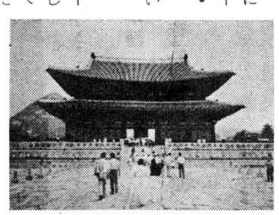
釜山は衆知の通り韓国最大の貿易港で、韓国の表玄関の役割を果しており、韓国政府直轄の市である。

釜山の名称は李氏朝鮮第四代世宗大王の頃（一四二六年）日本との交易が認められ"富山浦"と称して貿易を行なっていたが、山の形が釜に大変よく似ていたところから"釜山"と呼ばれるようになったと言われている。

市街地は急坂な道路が多く、山の手には教会が、ダウン・タウンには日本料理店や旧日本人公舎、家屋が今でも多く残っており異国情緒たっぷりの港町と言える。

釜山のメイン・ストリートは道幅も広く、舗装もかなり行届いている。しかし奥にはいった繁華街は極端に道路が狭く、その狭い道路の両端には背高ノッポの飲食店、レストラン、バーなどがひしめいて建っており、道行く人々には今にも両方から押しつぶされるような感じさえ与える。しかしこれも地形上無理からぬ事であろう。

筆者は日本映画を見たい、思い劇場街に行くと台湾・中国系が多く日本映画は全然上映していない。



或る古老が、

「日本映画を上映すれば韓国人の年輩者は好んで観に行く。そうなると他国の映画は勿論、自国のさえ観る人間が少なくなり採算が取れぬから禁止されている」

と笑いながら教えてくれた。

釜山市の中央高台に龍頭山があり、その頂上に龍頭山公園がある。

この公園に登ると港町釜山港をはじめ、市街地のメイン・ストリートは勿論、天候によっては対馬まで見えるという。ここには毎日多くの老人等が集合し、即席野外老人ホーム?を形成し、世間話に興じると言われるだけあって、この日も民族衣裳を着た老人等が楽しそうに語り合っていた。

又隣内には学生運動の記念碑や文祿の役で日本水軍を敗退させたという韓国の英雄李瞬臣の銅像が建っている。

更に大天望台の建設が進められていたが、

釜山は今大変な水不足、町中が断水騒ぎになっている。しかもソウルに降って釜山には降らない。

これは龍頭山の頂上にこの大天望台を作っているから、龍のたたりに触れている。釜山市挙げてお祭り（雨乞い）をするか、天望台をとり崩すしなければ水不足は解消されない

と深刻な顔で唾を飛ばしながら話す。

国連墓地、太宗台（新羅の頃、大宗烈王が高句麗、百済を滅ぼし、三国を統一した折、宮人や侍従の者を連れてこの地で遊んだといわれる伝説が、そのまま宗台になったと言われている）。海岸線と海の幸が豊富な松島等を見て廻り宿に帰る。

明日はいよいよ韓国の古都"慶州"を見れると心勇んでいたところ、何が原因か解らぬが突然襲ってきた腹痛と下痢に止むなく断念とうとう宿の一室から道行く人や子供等の遊びを眺めながら、帰るフェリー待ちの寂しい幕となった。

一週間の旅ではあったが現在の韓国の一部を知る事が出来た。

南北の問題をかかえながら農村の近代化、軽工業から重工業、文化遺産に対する完全確保と尊重、教育の高度普及（大学、専門学校の増設）の政策が取られ、国民一丸となって働いている。

そして次代を担う青年等は、国内事情（外出禁止、長髪禁止）を十分把握し、簡素な生活の中にも誇りを持って堂々としている。

又文化遺産に特別の注意を払い、最近報道された古墳発掘でも解る様に慎重に慎重を重ね、日本の様に乱開発はしないと自負している。

日本を見ながら明日の韓国を考える国策にこれからの日本がいかなる道を歩むか、又どうから交流してきた隣国（韓国）に対し今後どう対処していくかについては、日本国民は勿論、韓国国民にしても一抹の不安は隠せない。

対島を見、更には沖の島を通津しながら日本に帰り、社務を取っている今日、日韓両国、ひいては世界の共存共栄を祈ってやまない。